

## 自然生態園では

- インタープリターボランティアがお待ちしています



### ガイドウォーク(土日祝)

午前の部 / 10:30~12:00  
 午後の部 / 13:30~15:00  
 展示館にて30分前より受け付け(無料)  
 里山の自然のしくみ、人と自然の関わり・つながり、歴史など、生態園の魅力を、季節ごとのテーマにそって、楽しく解説します。

### 団体向けプログラム

遠足、環境教育、研修など学校や団体利用にも対応いたします。2週間前までにお申し込みください。

## 里山のくらし秋～冬編

石油やプロパンガスといった化石燃料が現在のように使用されるまで、雑木林の木々は薪や炭などの大切な原料でした。竜頭地区では、燃料として1日おきに直径60cm、長さ80cmに切りそろえ10束ほど持ち帰っていたといえます。また、化学肥料が普及していなかった時代には、木を燃やした後にできる灰はよい肥料になりました。田んぼや畑に敷きこむ肥料も、茅場や雑木林の落ち葉を利用しました。林は約15年～20年おきに伐採され、計画的に萌芽更新を繰り返してきました(※萌芽更新:立ち木を根元付近から伐採し、切株から発生する新芽を新しい幹に育てて林を再生させる方法)。春には伐採した切株からたくさんの芽が伸びます。2・3年後、「もや分け」といって丈夫な枝を2・3本に整理します。伐採後の若い林は、林床によく日光があたるので、植物たちが花を咲かせます。そこにはたくさんのチョウがやってくるのです。

かつては、毎年里山のあちこちで小規模な伐採が行われていました。さまざまな年齢の樹木が混じり合い、そのことが変化に富んだ複雑な自然環境を作り出していたのです。伐採したコナラやクヌギはシイタケのほだ木として、アカマツは鍛冶屋が農具を鍛える時の燃料に、また大きいものは農家の梁に利用しました。雑木林の下草や落ち葉は牛馬の飼料として利用したり、堆肥にした時に発生する熱を利用してハタバコやサツマイモの苗を暖めました。竜頭地区はハタバコの産地として有名だったそうです。

このように昭和30年(1955年)頃の里山は、いつも明るく開けた林床が保たれ、さまざまな野草が育ち、人が日常的に出入し、そしてそれを好む生きものであふれていたのです。

## みんなの公園・みんなの自然

- 動植物の採取は禁止です  
 貴重な生態系を守るために、生きものを傷つけたり園外へ持ち出したりしないようにお願いします。
- 園路からはずれないで下さい  
 石垣や田んぼの畦に入りこむと、足もとが崩れて危険です。また、そのような場所にもたくさんの生き物が住んでいます。決められた園路を歩きましょう。
- ゴミはゴミ箱へ  
 ゴミは決められたゴミ箱へ。できれば持ち帰りましょう。
- 自然生態園内は禁煙です  
 喫煙所は、生態園入り口の一ヶ所です。禁煙にご協力下さい。
- 自然生態園への出入り口は一ヶ所です  
 自然生態園の出入り口は、展示館の案内所だけです。通り抜けはできませんので、ご了承ください。
- ペットの同伴はご遠慮下さい  
 生態系への配慮のため、ペット同伴の入園はご遠慮下さい。

### ◆自然生態園の利用に関するご意見、お問い合わせ◆

〒766-0023 香川県仲多度郡まんのう町吉野4243-12  
 TEL(0877)79-1807 FAX(0877)79-1704

### 自然生態園へのアクセスマップ



自然生態園にも駐車場があります。  
 エントランス広場からの散歩道もあるよ。

# 自然生態園 秋冬 イラストマップ



逆様池の紅葉



メジロ



キセルアザミ

## 里山の暮らし

### ●里山とは？

里の山と書いて「さとやま」と読みます。1960年ごろ京都大学農学部の先生が考案した造語です。農山村の人たちが薪などを採りに日常的に出入りしていた山、「山里」をひっくり返して「里山」と呼んだのが始まりです。人里という言葉があるように「里」は、人家が集まり、人が生活をしている場所です。

### ●里山の環境

里山とは人家を取り囲むごく身近な自然なのです。そこで生活する人・屋敷・雑木林・竹林・谷戸田・畑・農道・小川・ため池などで構成され、それぞれがひとつながりになった環境です。

周囲の森は、人里から遠く離れた深山にある原始の森ではありません。また、天然記念物に指定されているような、珍しい生きものが住んでいるわけでもありません。しかし、里山には、さまざまな生きものがいて、自然環境がとても変化に富んでいます。里山の環境は、そこに住む人々が長い年月をかけて、代々農業を営むうちにできあがったものです。

自然生態園では毎年、昭和30年代当時の農業を再現して稲作を行っています。写真は秋の稲刈り風景です。



### ●人と自然の共存

では、人の手が加わっているのになぜ豊かな自然が保たれているのでしょうか？現在、日本だけでなく世界中から豊かな自然がどんどんなくなっています。

この「豊かな自然」とは、いったいどんな自然をいうのでしょうか？それは、どのようにしたら、次の世代に残していけるのでしょうか？今日は、そんなことを考えながら…地質と水が魔法をかけた自然環境を存分にお楽しみ下さい。

## 里山の動物たち

### ●赤トンボ

秋。自然生態園のあちこちで赤トンボの姿を見ることができます。

南の谷の上部ではリスアカネやムユタテアカネが石垣で羽を休め、田んぼのイノシシ柵にはノシメトンボがとまっています。下部の林の斜面には、赤



リスアカネ

トンボの仲間なのに全身が青いナニワトンボが生息しています。

北の谷を飛び回っているのは、アキアカネやウスバキトンボ。赤トンボとひとくちに言っても、種類によっては好む環境やくらしぶりがちがっているのです。



ムユタテアカネ

### ●鳴く虫たち

草むらややぶの中からいろいろな虫の声が聞こえてきます。

背の高い草むらの中にはスズムシやクササリの仲間。背の低い草むらの中にはショウリョウバッタ、トノサマバッタやクツワムシ。落ち葉や倒木の下にはエンマコオロギ。やぶの中

ではクツワムシやキリギリスの仲間…。トンボと同じように、鳴く虫たちも環境によって住み分けているのです。



エンマコオロギ

### ●秋から冬へ

秋が終わりに近づくと、自然生態園で見られる昆虫たちも少なくなってきます。多くの昆虫は卵を産んで一生を終えるのですが、成虫のまま落ち葉や倒木の下にもぐりこんで冬を越すものもいます。

また、幼虫や「さなぎ」の姿で春を待つものもいます。姿は見えなくても、命の営みは続いているのです。

## 里山の植物たち

### 里山には、ドングリのなる木が多いと思いませんか？

大昔の人々にとって、ドングリは大切な食料でした。時代が移り変わると共に、食料としてのドングリの役目は減り、ドングリの木は燃料やシタケのほだ木などとして使われ、毎日の暮らしを支える生活に欠かせない木として、何千年もの間、里山の林の中で人々の暮らしを助けてきたのです。

### ●自然生態園にあるドングリの木

一番多いコナラは、シタケのほだ木に最適。採ってもすぐに芽を出す、里山の林には欠かせない木なのです。(コナラのドングリは一年で大きくなります。)



コナラのドングリ

南の谷に多いアベマキは、樹皮のコルク層がビンのふたなどに利用されました。カブトムシ、クワガタ、ブイブイ(カナブンの仲間)やオオムラサキなどが樹液を求めて集まります。昼間は注意をしないとスズメバチたちもたくさん集まっています。

(アベマキのドングリが大きくなるには二年かかります。)



アベマキのドングリ

### ●秋に楽しいドングリ

団栗(どんぐり)。「まるいくり」という漢字を使って表されるドングリは、子どもたちにとって、秋の里山で会える魅力的な遊び相手です。そんなドングリは、里山にたくす動物や昆虫たちにとっても、命をつなぐ大切な食料です。里山の生きものたちにもドングリを残しながら、秋を楽しみたいものですね。

### ●秋に美しいドングリの木

紅葉という、カエデの仲間が代表ですが、コナラやアベマキは里山の紅葉の代表。秋のおひさまに照らされた木々は、一段と鮮やかに輝きます。



コナラの紅葉

自然生態園を彩る、コナラの紅葉を見にきまい!

# 自然生態園 イラストマップ

## 秋 ▶ 冬

で記された生きものは危険ですので、ご注意ください。

植物名 で記された植物はかぶれますので、ご注意ください。



紅葉の見頃は10月上旬～11月下旬です。

※ここに見られるのは、9月～12月の生きものです。  
 ※マップ・イラストは原寸の縮小ではありません。  
 ※開花時期は過去の観察記録を基にしております。  
 生きものですので、気候によってはこの時期に観察できるとは限りません。

- 1 ルート番号
- あずまや
- W.C.
- バリアフリー
- 階段

自然生態  
展示館

駐輪場

駐車場